

*Splendid Marvelous Tours*

貴女の妄想叶えます

Episode 7

# 裸族の性人儀式



濠門長恭

## 目次

1. 日本時間3月18日午前3時.....	- 4 -
2. 到着.....	- 8 -
3. 前日.....	- 22 -
4. 不浄.....	- 27 -
5. 破瓜.....	- 35 -
6. AV.....	- 46 -
7. 禁忌.....	- 64 -
8. 処刑.....	- 78 -
9. 日本時間3月22日午前1時.....	- 85 -
後書き	- 87 -

## Splendid Marvelouse Tour へようこそ！

弊社では貴女様の被虐願望を叶えてさしあげるために、Suspenseful Option System を御用意致しております。

Non [Vartual / Fantasy / Role-playng] 最少催行人員は1名様です。

末尾のメールフォームより、できるだけ詳しくご要望をお知らせください。

弊社が貴女様に最適なプランを個別に設計させていただきます。

なお、貴女様の安全は社会的にも肉体的にも守れるよう最大限の努力を致しますが、必ずしもこれを保障するものではありません（現在まで、国内における事故例はありません）。

弊社にて定期的に催している企画もございます。国内限定で安全性も高く、料金も超格安に設定していますので、まずはこちらをお試しになられることを推奨致します。

1：新年寒中水泳 1月4日（日帰り）

催行人員：1名様～30名様

参加費：交通費のみ（諸経費はお客様負担です）。

- ・男性同伴者との参加も可能です。（推奨します）。
- ・禪での参加ですが、胸に晒を巻いていただきます。

2：禪海女ショーと夜の鮑売り 夏季随時、日程応相談。

催行人員：1名様～3名様

参加費：交通費のみ（諸経費不要）

- ・地元女性の参加者が素潜りを指導します。
- ・ベテラン海女から私的性裁を受けることがあります。
- ・宴席での接待は義務ですが、鮑売りは自由参加です。

(売上代金の70%を還元致します)

3：夏季柔道合宿 8月12日～8月17日

催行人員：3名様～8名様

参加費：交通費+3万円(諸経費含む)

- ・練習、入浴、宿舎とも男女同室です。
- ・道着(上衣のみ)は素肌に着用していただきます。
- ・柔道未経験者にも、手取り足取り指導いたします。
- ・貞操の保証は致しかねます。

4：寒中座禅修行 12月10日～12月16日

催行人員：2名様～5名様

参加費：交通費のみ(諸経費不要)

- ・修行は女性のみですが、一般男性が補助します。
- ・警策は肩だけを叩くとは限りません。
- ・姿勢の悪い女性は、縄やベルトで物理的に矯正します。
- ・座禅転がしは拒否できません。ピルの使用は任意です。

その他、各種企画を検討中です。

国外でのイベントも企画してまいりましたが、リスク管理体制を見直すあいだ、休止させていただきます。

SMツアー有限公司

## 1. 日本時間3月18日午前3時

高山昭雄はひとり社長室で、固定電話のディスプレイとにらめっこをしていた。過去のSMツアーの記録も、裏社員たちの『適性試験』の映像も、新しく送られてきたポニー牧場やリョナファイトの映像も、さすがに今は鑑賞する気分になれない。

『全裸サンバ』ツアーで、参加者の二人とコンダクターの真園蕾、さらには裏目付として派遣した村上詩織までが、プロの誘拐団に拉致されて——救出には成功したものの、蕾と詩織は重傷を負わされた。軍隊を動かしてくれた人物には、大きな借りを作ってしまった。

高山は即座に海外企画を中断したのだが、ひとつだけ例外があった。3月下旬の卒業旅行だ。裸族の性人儀式に参加して、処女も卒業したいという、仲良し二人組。

去年の秋に申し込みがあったときには、言葉を尽くして無謀な冒険を諦めさせようとした。たとえ数日だけでも裸族と同じ生活をするというのは、それだけでリスクが大きい。飲み水ひとつにも危険がひそんでいるし、有毒生物への免疫もない。しかも、性人儀式はロリコン観光客への売春の場でもある。裸族にしても買春客にしても、女囚性務所を訪れるVIPやポニーガール牧場へ乗馬に来る客に比して、性感染症のリスクが桁違いだ。

しかし、田中梢恵と宮田美咲の二人は、追い返されても追い返されてもSMツアー社を訪れて——ついに、高山は根負けした。というのは、正しくない。二人の年齢に負けてしまった。これまでの参加希望者の中で最年少なのだ。幼いとさえいえる年齢で、アブノーマルな性体験に身を投じたいという熱望。それは、高山のアニマを激しく揺さぶった。

もっとも、二人の少女の性的妄想を具現化するには、費用面での難点があった。

さいわいに、大手ツアー社で『中南米古代文明探訪ジュニアツアー』という卒業旅行企画があったので、これに紛れ込ませて現地では別行動を取る——という形にできそうだった。

たが。親に請求できる金額は、表向きのツアー分だけだ。少女二人の貯金にしても、雀の涙だ。

裏コンダクターの経費、現地案内人の費用、そして部族への根回し。念のために、そして気休めでしかないが、治験の段階にあるAIDSワクチンの入手。百万円では、とても追いつかない。

もともと、裏ツアーは真性マゾ女性の願望を叶えてやるための慈善事業でもあり高山個人の趣味でもある。父が遺してくれた貸しビルの収益を根こそぎ突っ込んでいる。しかも、表稼業のツアー企画は薄利少売ときている。さらに二百、三百と赤字を積み上げては……焼け石に水ではなくて油を滴らすようなものだ。

というのは、『だから出来ない』という理由付けでしかない。『こうすれば出来る』という方法は、たいていの場合に存在する。高山が考えついた方法とは、ポニーガール牧場と同じやり方だった。イベントをコンテンツ化して、有料販売するのである。

AV女優が裸族に絡むコンテンツがある。女優でなく、現地人に扮した少女が本物の儀式に参加すれば、十倍の価格でも十倍は売れるかもしれない。国内での販売は最初から諦めてハードな内容にして。ビジネスとしてドン・ガストーニに持ち掛ければ、さらに十倍以上の収益が見込める。ダークウェブで入手したコンテンツを大っぴらに晒す馬鹿はいないから、むしろ身バレの懸念も無い(かもしれない)。と、高山は強引に決めつけてしまった。ので、ふたりの少女には内緒で事を運んだ。

AVの撮影チームは、SOSを手掛けるうちに広がった伝手でリクルートできた。女優を帯同して体裁を整えるだけでなく実際に表AVも作り、二人の新人は裏AVで起用する。

部族に顔の利く現地人を通じて長老と話をつけ、ツアーの日程に合わせて撮影チームのスケジュールを調整して。あとは2週間後の出発を待つばかりとなったところで、サンバの誘拐騒動が勃発したのだった。

こちらの事件は、解決するべくして解決したようなものだった。高山の功績では、まったくくない。北米大陸と南米の一部にまでテリトリーを持つドン・ガストーニのレンタル商

品であり、引退したとはいえ闇社会に隠然たる影響力を持つブレイカー老のただひとりの孫娘にして愛奴のお姉様であり性的玩具でもある詩織を巻き込んでしまった誘拐団の不運に尽きる。

海外ツアーのリスク管理を見直すなら、その筆頭が、同じ南米で同じ時期に催す、この企画だった。と同時に、誘拐事件で有効に作動した暴力装置に頼るという選択肢も考えられた。

高山はドン・ガストーニから見積を取ったのだが。

「フィルムの経費だと思えば、利鞘を掠めるわけにもいくまい」

人件費と機材費と国軍上層部への賄賂と。四日間で五十万ドルを提示された。一個分隊十人と攻撃ヘリ一機が二十四時間哨戒に就き、別の一個分隊と兵員輸送ヘリがスクランブル待機する。三交代制だから、動員数はその三倍。建築工事では一工数が三千元、民間小型ヘリのチャーター料が時間あたり十萬円の国内相場と比較して、法外とはいえない。

とはいえ。ドルにして二万か三万の捻出に知恵を振り絞っていたのだから、発注できる金額ではなかった。

しかしツアーを中止すれば、これまでに投入した費用が全損になってしまう。

強行は不可能、中止は大赤字。身動き取れなくなったところに、福音が訪れた。ドン・ガストーニから話を聞いた人物が、自分の愛奴を性人儀式に放り込みたいと申し込んできたのだ。ツアーに参加するのではなく現地集合だが、高山が押さえている案内役が族長への口利きをするのだから、やはりSOSの顧客には違いなかった。催行間際の割り込みだから割増料金は覚悟していると言って打診された額が四十五万ドルという途方もない数字だった。

あと五万ドルくらいなら、裏AVのシナリオを過激に書き換えるのと、累積赤字のささやかな補填を諦めるのとで、ツアーを想定内の赤字に抑えられる。

押掛救世主からは、愛奴の扱いについて幾つかの注文が伝えられた。その中には、シナリオの重要パートに彼女を参加させるという『決定事項』もあった。

高山は、フロル・ブレイカーと名乗る少女とも映像通話を交わして、最初の二人の顧客と年齢は同じ（だと、当人は主張した）でも、精神的にはずっと成熟していると知っていたのだ。フロルが、厳密な意味では性人儀式に参加する資格を三年も前から失っているのは、詩織の以前の報告書でとっくに知っていたが。

——電話機の小さなLEDが点滅した。高山は手を伸ばして、最初のコールと同時に受話器を取った。

“Checkmate King Two , This is White Rook. Over.”

高山は苦笑した。心のゆとりが戻ってきた。

フロルが詩織と娯談をしたおりに『007危機一発』にちなんだカクテルを注文した逸話を思い出した。やはり、ブレイカー老の仕込みだったとみえる。

“This is Checkmate King Two. White Rook, Report condition. Over.”

“An elder and two youngs arrived. Two youngs into forest with NYNOMI. Over.”

木島菜穂子と二人の少女が無事に到着して、少女たちは現地人の案内で森へ——ニャノミ族の集落へ向かったという報告だった。

ニャノミ族の庇護下に入れば、ゲリラも誘拐団も手が出せない。森に潜む裸族の弓矢には、アサルトライフルもグレネードランチャーもサバイバルナイフも敵ではないのだ。

“Thank you for youre correspondence.”

“Sure, and Over.”

フランス語が母国語の軍隊なのに英語とは、米軍との共同作戦に備えての Battle language だろうか。ブレイカー老の趣味に合わせているのかもしれない。サンダース軍曹もヴィック・モロウも、まさか最前線から地球の裏側まで交信する時代が来るとは、思わなかっただろう。

## 2. 到着

「あそこです。ニャノミのおとこ、きています」

モーターボートを運転しながら、エリクが前方の左岸を指差した。全身に化粧を施して腰帯を巻き、脚に毛飾りを着けた全裸の男が二人、こちらに手を振っていた。

少女たちの視線は、どうしても裸族の股間へと吸い寄せられてしまう。剃っているのか抜いているのか、そこに淫毛は無かった。腰帯から下へ伸びる細い紐で付け根を押さえているせいもあって、(実物は、ふたりともまだ見たことはなかったけれど)勃起したペニスと同じくらいの長さに見えた。

野外で性器まで露出した成人男性の姿に、ふたりの少女は、事前に知っていたし覚悟もしていたのだけれど、やはり驚きと羞恥と妖しい疼きとを禁じ得ない。

すぐにでも、ふたりとも同じような姿になるのだが、今のところは、褐色に染めた肌をズボンと長袖のシャツで隠し、顔全体にスカーフも巻いている。

とうとう、ここまで来た。ふたりの少女は、しみじみと思う。

卒業旅行を親に認めさせるまでの経緯とか、SMツアー社との交渉とかは、遠い昔の話としても、『中南米古代文明探訪ジュニアツアー』の参加者として成田を飛び立って、旅客機を乗り継いで、日付変更線を越えたので出発したのと同じ日の同じ時刻に南米へ到着して。ガイドのお姉さん(ふたりの感覚としては小母さん)ともどもツアーから別れて、小型機で境界の入り口まで飛んで。そこで一泊して、タンニングローションを使って文字通りの一夜漬けで現地人に化けて。

全裸になってローションの塗りっこをしたとか、菜穂子お姉さんに手伝ってもらったとかのエピソードは省略するけれど。翌日に、このモーターボートで出発して。とうとうここまで来た。

——エンジン音が小さくなって、モーターボートの速度が落ちた。

「まだ付いて来てるね」

田中梢恵が空を振り仰いで言う。ごつごつした輪郭のヘリコプターが浮かんでいる。街中で飛んでいるのを見かけるよりも、ずっと大きなシルエットだ。あれが自分たちを見張ってるんだか護ってるんだかしてくれているのは、ガイドの木島菜穂子から教えられているのだけれど。こんなに近いのにバタバタという音もさせずに、幽霊みたいに浮かんでいるというのは、なんだか気味が悪い。

機首からヌウツと突き出ているパイプの束が機関銃だと知ったら、単純に「怖い」と思ったかもしれない。

モーターボートが河岸に横付けする。ニャノミ族の男性に手を引かれて、田中梢恵と宮田美咲はボートから降りた。菜穂子はボートに残っている。

「現地の少女として儀式を体験したいのだね。だったら、ガイドはいないほうが良い」

下心を隠して、高山はそう説明した。嘘は言っていない。ガイドがいれば、なにかと頼ってしまう。原住民の中にも、カタコト英語を話す者がいるから、最低限の意思疎通はできる。

「実際のところ、会話は不要だしね。現地では、長老の指図に従っていればいい」

長老が決めた男に処女を破られることになる。部族のイケメンを選んでもくれるか、買春に来たキモデブ親爺をあてがわれるか、その場になってみなければ分からない。

「それでも、行くのかな」

高山の脅し（その実、挑発）に一瞬は怯んだ梢恵と美咲だったが、顔を見合わせうなずき合って。

「やります。ふつうの女の子には絶対に出来ない体験をしたいんです」

高山が微笑した心の奥を少女たちはうかがい知ることもできなかったのだが、同席していた木島菜穂子には、だいたいところが分かっていた。

少女たちは、予想もしていなかった凄絶な体験をすることになるだろう。しかしそれは、

高山の嗜好ではあるが、同時に少女たちの心の奥底に秘められた願望を満たしてあげることにもなる。彼女たちも、サイトの隅っこに設けられたアンケートの百以上もの項目に答えて、それをパスして裏ページに辿り着いたのだ。当人たちは自覚していないが、ふたり揃って、レズっ気のある真性マゾだと高山も菜穂子も知っている。レズっ気が無ければ、いくら仲良しだといっても二人そろって処女喪失したいとは思わないだろう。だから、タンニングローションの塗りっこをしたときには、それなりのエピソードもあるのだが、それはともかく。処女喪失の相手に見ず知らずの男を望むのは、強制や暴力を無自覚に望んでいるからだ。もちろん、露出願望も並外れている。

そういった経緯を、菜穂子はちらっと思い出しながら。

「それでは、四日後に迎えに来ますね。たくさんの冒険をしてらっしゃい」

ふたりの少女は、四日後にモーターボートがここへ迎えに来てくれると思っている。しかしその場面は、高山の書いたシナリオには無い。

モーターボートが離岸し、旋回して遠ざかっていく。

「ざああ、はば」

ふたりの少女には、そう聞こえた。ニャノミ族の男性に前後を挟まれて、ふたりは森の奥へと冒険の最後の道筋を辿る。

喬木に左右を挟まれた、踏み分け道にもなっていないジャングルを二十分も歩くと、地面が剥き出しの広場に着いた。原始的な草葺きのテントが広場を取り巻いているが、プレハブのコテージが立ち並ぶ一画もあった。さらに奥のほうに、大型のキャンピングトレーラーらしい箱が居座っている。箱の屋根にはパラボラアンテナが突き出ている。しかし、ふたりの関心は家ではなく人に向けられた。

広場には裸族の老若男女だけでなく、カジュアルな服装をした観光客の姿もあった。男三人のグループと、男女ペアが二組。観光客イコール買春と思い込んでいた少女たちには、ちょっと意外だった。

案内役の男たちは、彼らの注意を引かぬように遠回りして、いちばん大きなテントにふたりを連れ込んだ。

“Welcome.”

テントの奥には、腰から下を派手な色使いの布で包んだ老人と、若い娘が座っていた。英語で挨拶をしたのは、老人のほうだった。

「あ、ハロー」

“We treat you our tribe. Obey me. You ask this girl anything.”

構文は怪しいが、発音だけは二人の日本少女よりも確かだった。

梢恵と美咲は、居心地悪げに老人と娘に向かい合っている。相手の娘は裸に腰帯ひとつ。細い紐を平たく並べているが、腰を巻くのにはすこし短く、両端を束ねた細い紐を木のボタンでつないでいるので、正面はがら空き。無毛の股間は元より、淫裂の内側のサーモンピンクまでが見えている。もっと正確にいうと、紐が木のボタンから下へ伸びて——サーモンピンクの内側に食い込んでいる。

けれど梢恵と美咲が戸惑っているのは、縦に食い込んだ紐も含めて、そのことではなかった。裸族が裸なのは当然だ。しかし、娘の顔がちっとも原住民らしくない。南米の原住民は何万年も昔にアジアから渡ってきたという説がある。肌の色の違いはあるけれど、顔立ちは日本人とも似ている。

しかし、目の前にいる娘は、ほっそりした輪郭と、高い鼻。淡い色合いの長い金髪。西洋のパーツで作られている。ニャノミ族は、売春でも避妊はしない。それで生まれた子供もいるというから、彼女もそうなのだろうか。自分たちが裸族に扮そうとしているからこそ、相手もそうではないかという疑念は盲点になっていた。

娘がふたりに向かって、小さな声で話し掛けた。英語のように聞こえると思ったのだけ

れど。

『※はじめまして』

女性の声で日本語が聞こえた。

『※わたしの名前はフロルです。こちらにいらっしゃるのは、この集落の長老です』

声は、首に提げている小さな箱から発せられている。翻訳機だ。ニャノミ族の言語は翻訳できないので、フロルは英語でしゃべっている。翻訳機を使いこなせて、さっきの老人よりも流暢に英語を話せて。裸族の中には、数年間を街に留学して初等教育を受けた子もいるというから、きっと彼女がそうなのだろうと、ふたりは勝手に納得した。名前が西洋風なもの、そんなものだろうと思うだけ。混血の子には、父方にあやかった名前が多いという事前知識が、疑問を抱かせなかった。

もちろん、高山からも菜穂子からも、フロル・ブレイカーなんて名前は聞いていない。

「あたしは……」

自己紹介をしようとした梢恵を、フロルが手を上げて制した。

『※その前に。ふたりとも、わたしと同じように、裸になりなさい』

「え……？」

梢恵と美咲が、顔を見合せて。

「そうよね。その為に来たんだもの」

梢恵が、自分に言い聞かすようにうなずいた。この場にいるのは全裸の、しかも自分たちと同じ年頃の同性。男性もいるけれど、とっくに現役引退してるだろうし。なによりも、これから四日間は全裸を男性、それも買春目当ての助平男どもにまで見せつけるんだもの。これくらいでおたついてちゃ駄目よ——と、自分を励まして。思い切り良く衣服を脱ぎ捨てた。

梢恵を見習って、美咲も全裸になった。

『※あなたたちは、着ている服と一緒にアイデンティティも脱ぎ捨てました。あなたは、ニャノミのラナです。あなたは、ラニ』

フロルが、梢恵と美咲を順に指差して、ニャノミ族としての名を授けた。老人は言葉が分かっているのかいないのか、重々しくうなずいている。

『※でも、あなたたちはニャノミの娘になっていません』

フロルがテントの外に向かって呼ばわった。

「いんぎあ、だーに（ふたりには、そう聞こえた）！」

※以後、ヒロインたちが理解できた現地語はルビ表記、それ以外は聞こえた通りに平仮名で表記します。

フロルよりずっと年少の、性人儀式に出るのは三年くらい先になるだろう女の子が四人、腰帯や大きな木の葉っぱや小さな壺や、いろんな物を持ってテントに入って来た。

「わーちゃふむんと」

入れ替わりに、長老がテントを出て行った。

『※脚を開いて立ちなさい。手で隠してはいけません』

女の子たちは、ふたりを取り巻くように座り込んで。手に持っていた品を床（地面）に並べた。木の葉っぱを広げて、壺の中身を篋で掬い取っては塗りつけていく。黒くてどろっとしている。

『※ニャノミの娘は、股の間に毛を生やしていません。抜きます』

「えっ……?!」

美咲が、しゃっくりみたいな声をあげた。股間を無毛にするのは覚悟していた。心の奥を曝すと、性人儀式の画像を見たときから、妖しく憧れてさえいた。けれど。剃るのだと思いついていた。抜くだなんて、痛そう……

女の子がライターを手に取った。いきなり文明的な道具が登場して、梢恵も美咲も拍子抜けする。葉っぱに分厚く塗り込められた樹脂(?)に火が点けられた。

フロルは『抜く』と言っていたけど、なんだか様子がおかしい。

「あの……それ、どうするんですか？」

「ひんでい、あんにやん、ニャノミ」

フロルが、翻訳機を使わずに答えた。黙って言うことを聞け。そういうことなのだろう。

梢恵が両手で胸を押さえた。怖いけれど、だからではない。股間から両手を離すことで、覚悟を表明したのだ。美咲も、それに倣った。

「ふふん」

フロルが微笑した。

四人の女の子たちは、じっと炎を見詰めている。炎はすぐに小さくなった。ひとりの女の子が炎に指を突っ込んで、樹脂の表面をチョンツとつついた。フロルを見上げてうなずく。

「ちょうま、にゆえ、らーこ」

フロルが答えると、女の子は両手で葉っぱを持ち上げた。まだ炎は消えていない。

『※すこし熱いですが、火傷はしません。絶対に身体を動かさないでください』

女の子が葉っぱを縦にして、ふたりの股間に押しつけた。

「きゃああっ……?!」

梢恵も美咲も悲鳴はあげたが、フロルの言葉を信じて、全身を突っ張っている。

女の子が、葉っぱの上から股間を揉む。もうひとりが後ろにまわって葉っぱを引き上げ、尻の谷間にも揉み込む。

(あ……?)

これは原始的なブラジリアン・ワックスではないだろうか、梢恵は思い当たった。原始的というより、元祖といったほうが正しいかもしれない。

自分が何をされているのか見当がつくと、恐怖は薄れる。女の子の微妙な指使いに意識が向かう。女の子にそういう意図は無いのだろうけれど、性器を刺激されているのだから、妖しい気分になってしまう。自分ですれば指の感覚も混じるが、他人の指だと純粋に性器への刺激だけを感じる。けれど、樹脂の向こう側からなので、すごくもどかしい。

(駄目。イタズラをしてるんじゃないんだから)

妖しい気分を振り払おうとするのだけれど、どうしても感じてしまう。性器への刺激そのものが強烈なのではなく、他人にそういうことをされているという意識が、心臓を驚掴みにして子宮をねじあげる。肛門まで刺激されて、羞恥の感情と官能とが混然となる。

いつか、ふたりの身体から緊張が抜けていく。自分がマゾの快感に目覚めかけているということに、ふたりの少女は気づいていない。

しかし、女の子たちは意図的に性感を刺激しているわけではないのだから、もどかしさが募るだけで官能は高まらない。

そうして十分ほどが過ぎて。

『※毛を抜きます。すこし痛いですが、我慢してください』

後ろにいる女の子が、手を動かした。

びききききと、肛門のまわりに鋭い痛みが奔った。

「きゃあっ……」

予告されていたので叫びはしなかったけれど、じゅうぶんに悲鳴だった。

正面に座り込んでいる女の子が、半分剥がされた葉っぱを前からつかんで。

べりべりべりっ……下から上へ引き剥がした。

「きひいいっ……」

今度は完全に悲鳴だった。稍恵も美咲も、股間を両手で押さえてうずくまる。

『※立ち上がりなさい』

ふたりとも、足を踏みしめるようにして立ち、自発的に脚を開いた。

『※まだ、すこし残っています。これは燃やします』

女の子たちが、小さな松明に火を点けた。炎を股間すれすれにサアッと走らせる。ちっとも熱くなかった。生温かい風に吹き上げられるような感触だった。

二度三度と温風が吹き上げて。女の子が股間を掌で逆撫でて燃え滓を払い落とすと、ふたりはニャノミの娘と同じになった。ヒリヒリと肌の突っ張る感覚は残っているけれど、毛穴すらも見分けられないくらいに平坦だ。

「まーかんだ、わけー、びび」

女の子が、床に置いていた紐の束を取り上げた。腰帯だった。フロルが身に着けている赤い腰帯とも、女の子の薄茶色とも違って、真っ白だった。

『※儀式用のベルトです。純白は処女を意味します』

腰帯は十本の紐で作られて、両端が細く縛り留められている。二本の細い紐が腰帯の中

央に編み込まれて、長く垂れている。

後ろから腰帯を当てられて前へまわされた。両端は七、八c mくらい離れている。縦紐が後ろから前へ股間を割って引き上げられ、腰帯の両端に結びつけられた。それだけだと、すぐにずり落ちてしまうのだが。

股間を割ってV字形に伸びる紐に、直径二センチほどのボタンが絡められた。V字形がY字形になって、縦紐は淫唇に埋没した。

「……………」

「……………」

ふたりとも無言だが、唇を噛んでいる。タンニングローションで肌を染めていなかったら、頬がピンク色に染まるくらいの変化は表われていただろう。

女の子がボタンを左右に回しながら、ゆっくりと引き上げていく。Y字形がT字形に近づくにつれて、腰帯が引き締められていき、縦紐はますます食い込んでくる。

最後にボタンがくりっと回されて、恥丘の真下——クリトリスのところで止まった。手を放しても、その位置から動かない。ボタンは内側がくぼんでいて、まるでクリトリスのキャップだ。

じっとしていても、じんじんと痛気持ちいい感覚が押し寄せてくる。このままで歩いたり、まして踊ったりしたら——どうなるか、想像するのが怖いけれど、すぐにでも試してみたいくなる梢恵だった。

ふたりの支度は、まだ終わらない。

膝の下には、白い布を巻いてもらった。

『※足飾りも儀式用です。純白は相手が決まっていないという意味です』

相手がすでに決まっている者は、青い布を巻くのだという。白い布の娘には、長老が適当な相手を見繕う。フロルも白い足飾りだった。

最後に、女の子たちがそれぞれ二人がかりで、梢恵と美咲に化粧を施した。白い顔料で大腿から踝まで細い線が描かれる。乳暈が赤く塗られて、同じ顔料が脛にも塗られた。

梢恵と美咲は互いに見交わして、そこに見知らぬ少女を見つけ出す。

『※夕方までは、自由に振る舞ってかまいません』

すっかりニャノミの娘になりきったふたりに、フロルが心構えを教える。

『※できるだけ、多くの仲間と話をし、ニャノミの言葉を覚えなさい。お客に話しかけられるときもあるでしょうが、ジェスチャーで対応しなさい。決して英語や日本語で受け答えしてはいけません』

もしも観光客からカメラを向けられたら、逃げてはいけない。手を差し出して「マネー、マネー」と要求すること。最低でも1ドル。ポーズを要求されたら5ドル。もらったマネーの半分は、部族に差し出さねばならない。

(風俗のシステムみたい)

梢恵は余裕たっぷりに、そう思った。写真を撮られることも、最初から覚悟している。これだけ変装していれば、写真がネットに流出して漂流して、親や先生や友人に見られたとしても、顔バレはしない。

『※身体を触るお客もいます』

握手くらいはサービスだが、それ以上は『マネー』。ただし『※女性器』だけは触らせてはいけない。

『※乳房とお尻は、マネーで触らせてもいいし、拒んでもかまいません』

写真はともかく、身体を触られるのは嫌だなと思ったけれど。明後日は、身体を触られるどころじゃ済まなくなる。準備運動のつもりで、お小遣い稼ぎをしてみようかなとも迷う梢恵だったが。

『※言うまでもないでしょうが、あなたから触るのは禁止です』

やっぱり、観光客の目が届かないところへ逃げていようと決めた。

四人の女の子たちがテントから出て行って、入れ替わりにふたりと同年代くらいの娘が族長と一緒に歩いて来た。

『※あなたたちの案内役をしてくれるネサです』

娘がふたりに向かい合って、右手を差し出した。

「はろ、みみんネサ」

ハロー、私はネサです——だと、理解した。

部族の習慣なのか、西洋流儀なのかは分からないけれど。とにかく、順番に握手した。

「にふあーて。……じーじ」

ネサが手招きしながらテントを出る。発音自体も聞き取れないけれど、とにかくついて来いという意味だと理解して、ネサに続いてふたりもテントを出る。

『※露出行為を楽しんでらっしゃい』

たちまち注がれるニャノミ族の視線に気を取られて、フロルの言葉は翻訳機の誤訳だろくらいにしか考えないふたりだった。

自分たちがニャノミ族からどんなふうに使われているか、ふたりとも深くは考えていない。性人儀式には、近隣の集落からも多くの男女が参加する。近親での交配を避けるために、異なる集落の男女が結ばれることが望ましいとされている。近年では、観光客の宿泊設備を整備する意味でも、開催地が固定されて——売春地帯と化しつつあるのだが。

梢恵と美咲も、他の集落から参加した同族だと思っているニャノミも多いのではないだろうか。フロルほどではないが、白人の血が混じっているらしい若者の姿が散見される。頭髪が縮れている青年は、アフリカ系かもしれない。ニャノミ族の肌は淡い褐色だが、彼は黒褐色だった。

ネサは、ふたりがニャノミ族ではないと知っている。村を案内しながらも、観光客の目を惹かないように注意しているのが分かった。

さり気ない仕草でテントを指差して『へま』

コテージや小屋は『きばんな』

肘から先だけを小さく振って、広場を囲む森を『むばお』

一本の樹ずつを指差して『うんてい』

別の種類の樹も『うんてい』

観光客は『たりい』

ふたりも小さな声で復唱するのだが、ほとんどは頭を素通りする。好奇心に圧倒されて、クリトリスを圧迫し粘膜を擦る紐の存在は、それほど大きくは感じなかった。もっとも。

「みぐいこわーじ」

ネサに太腿を軽く叩かれて。

「え……？」

がに股で歩いて見せられては、自分の不格好に気づく。あわてて脚をしゃんと伸ばして、股を閉じて歩くと

「んんっ……」

軽い痛みと圧倒的な快感とに襲われて、腰が砕けかける。

どうして、ネサは（だけでなくほかの娘たちも）平気なのだろうかと思議に思った。幼少時からずっとクリトリスを押しえつけられているせいで、未発達なうえに包皮が硬くなっているのだが、ふたりにはそこまで想像できない。

痛気持ちいい感覚に悩まされながら集落を一周し終える頃には、気を逸らすコツをつかみかけていた。

名前を覚えるのはともかく。ふたりが戸惑ったのは生活習慣だった。あからさまにいえば——排泄。

基本は、森の中の決められた場所での立小便。虫に咬まれたり蛇に潜り込まれたりする危険があるので、女も男と同じように立ったままで。縦紐はボタンで緩めて、小淫唇と一緒に左右に引っ張る。跡始末は、これも男と同じだった。つまり、なにもしない。

ネサが実演して見せた。

「まざりびお、まざりびお」

あなたたちもやってみなさい——と言っているらしい。梢恵と美咲も。脚を軽く開いて腰を突き出して、両手で紐ごとくばあして……いろいろ努力してみたけれど、出なかった。

ネサが軽くふたりの尻を叩いた。

「うばねーら……」

長い音節は聞き取れなかった。

大きいほうはニャノミにとっても、そう簡単ではない。河であるのだ。ふたりがモーターボートを降りた場所ではない。樹を伐って丈の高い草も抜いた道を行くと、五分ほどで河岸に出る。そこにも小さな栈橋が設けられていて、両側に細長い浮きが突き出たカヌーが三艘と、大小のモーターボートが一隻ずつつながっていた。そこからさらに五分ほど下流へ行くと、河の中に木の檻があった。とても栈橋とは呼べない細い木の道でつながっている。

檻の中にしゃがんで、腰まで水に浸かって用を足すのだという。天然のシャワー付き水洗トイレだ。さすがに、このときには腰帯をはずす。『まざりびお』と言われなかったの、ふたりともほっとした。

集落へ戻ると、すでに夕暮れだった。というのは、正しくない。ふたりがテントを出たころにはすでに陽は傾いていた。ようやく、時の移ろいにも気を留めるだけの平常心を取り戻しかけているといったところだ。

広場では五か所で火が焚かれていて、それぞれのまわりには鉄棒で吊られた鍋が幾つも掛けられている。これは、ニャノミ族が彼らなりに近代文明（金属）を採り入れた調理法だった。焚火の中に投げられている土の塊が、本来の調理法である。女たちが鍋を掻き混ぜ、土の塊を時折ひっくり返している。

薄く闇が忍び寄り、炎がひときわ明るく見えるようになると、夕食が始まる。二百人ほどのニャノミ族が五つに分かれて焚火を囲む。いつの間にか十二人に増えていた観光客も、いちばん大きな焚火のグループに加わった。ふたりの少女とネサは、隅っこの焚火。フロルも加わった。

樹皮を加工した椀に、どろっとしたスープが注がれ、地面に広げた大きな葉っぱの上に、

焼けた土塊を割って取り出された蒸し肉が並べられる。椀に口をつけてスープを啜り、手づかみで肉を食べる。

ふたりもフロルとネサを真似て、おそろおそろ肉をかじってみた。じゅうぶん火が通っているのに生臭い——と感じたのは、ふんだんな調味料を使った料理に慣らされた舌のせいだろう。そのかわり、スープは塩味が利いている。肉とスープを交互に口へ運ぶと、エンドレスに食べられた。観光客たちは、持参した酒類を呑んでいる。

食事が終わって、跡片付けは男女それぞれで分担する。男たちは大きな焚火を残して広場を掃除し、女たちは原始的な食器を河で洗う。

ふたりは跡片付けを免除されて、族長のテントで言葉の勉強。

『※あなたたちが日本人だと知っているのは、長老と私だけです。みんなには、あなたたちは言葉の違う部族から儀式に参加する仲間だと説明してあります。そのつもりで接してください』

勉強というよりは、五、六人の子供たちとおしゃべりだった。子供たちはややこしい言い回しをしないし、使う単語も限られている。ジェスチャーを交えて意思を伝え合ううちに、自然と言葉を覚える。

「<sup>モドル</sup>るじ、<sup>テント</sup>へまに」

そう言って子供たちが出て行き、最後のネサも家族のテントへ戻った頃には、広場の焚火も炎が小さく揺れるだけになっていて、じきに集落全体が眠りに沈んでいく。

テントの奥で長老が枯葉を集めた寝床に身を横たえる。

『※あなたたちも、ここで寝てください』

フロルが腰帯をはずして、長老の寝床よりも広く枯葉を敷き詰めてある場所に身を横たえる。ふたりも、それに倣って川の字になった。コテージの集まった一画では発電機の小さな騒音が森の静寂に突き刺さり、酔っ払いの声も聞こえていたが——それを子守唄代わりにしながら旅の疲れに包まれて、ふたりも眠りに落ちていった。

それを見届けてからフロルが起き上がり、コテージに隠れるようにしてうずくまってい

るキャンピングトレーラーへと姿を消した。

### 3. 前日

日の出とともにニャノミの男女が起き出してきて、広場が次第に活気づく。その気配で、梢恵と美咲も目を覚ました。

すでに長老の姿は無かった。これからどうするのかと戸惑っているうちに、フロルとネサが姿を現わした。

「はまり、ますぶーじ」

フロルが翻訳機を使わずに朝の挨拶をした（のだろう）。

『※今日はあなたたちもニャノミの処女として、お客の目を楽しませてあげなさい。手を楽しませてあげてもいいです』

ふたりとも羞恥と性的冒険への期待とが縋い交ざって、心臓の鼓動が早くなる。

テントの外へ連れ出されて。天然自然の水洗トイレは、生理的欲求に押されてうまく使えた。すこし上流に戻ったところにある水浴び場で顔を洗って全身の化粧も洗い落として。テントで、昨日と同じ女の子たちに描き直してもらった。

朝食は、ひとつだけ残っている大きな焚火に掛けられている鍋からよそった雑炊のようなものを、それぞれのテントへ持ち帰って食べる。

それから、衣服を身に着けた観光客の前での露出行為。明日の儀式に出る娘たちが、嫁を探している若い男たちの目に触れるように広場を散策したり、友達同士で座り込んでおしゃべりをしたり。ついでに、観光客に近寄ってドルを稼いだりもする。

『※お嫁さん』とフロルは言ったが、近代的な結婚とは仕組が異なっている。明日の儀式でカップル（というか<sup>つがい</sup>番）になった二人は同居するのだが、それは蜜月の間だけ。子供が生まれれば、女の家族が中心になって育てていく。

妊娠しなければ、翌年の儀式に赤い腰帯で参加する。前と同じ男と結ばれたければ、男の同意があつてのことだが、足には青色の飾りを付ける。

儀式の直後だけが子作りの期間というわけではないが、不安定な妊娠初期を過ごすには乾季が好ましいから、季節はずれに生まれてくる子は少ない。

ニャノミ族の性道徳は、文明人よりもよほど健全だった。セックスとは、子供を作ることだとニャノミ族は考えている。だから、コンドームの使用は考えられない。その点については、梢恵も美咲も心配していない。きちんとピルで生理周期をずらしている。性感染症のワクチン注射も受けている。

『※あなたたちはニャノミなのだから、タブーを犯してはいけません』

妊娠につながらない行為、フェラチオやアナルセックスは禁忌だと、フロルは説明した。

『※男からプレゼントを貰うのは、ちっともかまいません』

だから観光客相手の買春も堂々で行なわれている——とまでは、明言しなかったけれど。

観光客たちは、フロルに好奇の目を向けることはあつても、ふたりは好色の目で眺めるだけだった。前髪を切りそろえたミディアム・ボブは、つまりニャノミ娘の髪型だし、顔の造作もわずかな違いを見分けられる観光客（主に白人）はいない。

最初はぎこちなかったふたりの挙措も、自分がニャノミ娘と見られていると確信できてからは、自然と大胆になっていった。

カメラを向けられると反射的に右手を突き出してチップをねだれるようになったし、手足をつかんでセクシーなポーズをつけられても笑顔を作れるようになった。さすがに、乳房や尻に手を這わされると、最初は身を引いていたが、ほかの娘を見習って、身体をくねらせてかわす手管まで覚えた。

もっとも。撮影や肌の触れ合いに性的なニュアンスを感じないニャノミ娘と違って、そして慣れない縦紐のせいもあつて、どうしても淫裂の奥が（控えめに表現して）湿ってくるのではあつたけれど。

陽が高くなるにつれて、船着き場が忙しくなってきた。モーターボートで乗り込んでくる観光客も増え、カヌーに乗って嫁探しや婿取りに訪れる他集落のニャノミも少なくなかった。

日が暮れる頃になると、ニャノミは三百人ほど、観光客も五十人ほどに達した。

『※大きなお金を落としてくれるお客は十人くらいでしょう』

フロルは婉曲に表現したが、大きなお金の総額は三万ドルくらいになるとも言った。

『※あなたたちは白のベルトだから、一人当たり五千ドルくらいでしょう』

撮影や「おさわり」のチップと違って、半分は『※政府の役人』に献上しなければならない。娘の取り分は四分の一だが、それでも邦貨に換算して十三万円くらい。援助交際での相場と比べても悪くないが、自給自足のニャノミにとっては、まさしくビッグマネーだろう。ただし、赤い腰巻になると千ドルくらいまで値崩れする。

そのわりに、集落に文明の利器が見当たらないのは——儀式の期間中は観光客に幻滅されないよう隠しているという側面もあるが、短波ラジオ一台が千ドル以上という流通経路の問題が大きい。

『※白、赤、赤と三年続けて一夜の婿を取った人もいました。チップもたくさん稼いで、彼女は都会で暮らし始めましたが、読み書きを覚えないうちに以前と同じ裸になって戻ってきました』

持ち慣れない大金で身を亡ぼすのは、世界共通というわけだ。

そういった他人の心配は、ともかく。観光客ではなさそうな人間、それも日本人が交じているのが気になった。三十過ぎくらいの男を筆頭に、二十代半ばくらいの男が四人と若い女が二人のグループ。大きなビデオカメラやバッグを担いでいる。

「あれって、AVの撮影じゃないの？」

美咲が正体を言い当てた。

「女の人は女優かな？」

性人儀式をネタにするのなら、来るのは男優だけで、女優は現地調達すればいいはずな

のだが。

「撮影が始まれば分かるよ。あたしたちは、できるだけ近寄らないようにしようね」  
もしも見破られたら、ろくなことにならないと、ふたりの意見は一致した。

見破るところか、撮影チームは高山からふたりの顔写真を提供されている——とは、梢  
恵も美咲も知らなかった。

ニャノミの食事は朝晩の二回だけで、昼にはマンゴーとキウイとドリアンを掛け合わせ  
たような匂いのきつい果物をすこしかじるだけ。観光客は持ち込んだ保存食を食べている  
らしいが、コテージを覗き込む無作法なニャノミはいない。ので、ふたりにもはっきりし  
たことは分からない。

午後からは、踊りの練習が始まった。

男女が隣り合って二列縦隊で並び、丸太を刳り貫いて皮を張った打楽器のリズムに合わ  
せてステップを踏む。

ドンドコ、ドンドコ、タンタンタンタン。左足を踏み出し、両脚を揃えてから右足を踏  
み出す。二歩進んだところで足踏み。

コココン、コココン、コココン、コココン。左右にステップを踏む。

ドンドコ、ドンドコ、タンタンタンタン。バックステップを二歩と足踏みを二歩。

そして、最初に戻る。

ドドドン、ドドドン。娘はその場でステップを踏むだけだが、男は前後を入れ替わった  
りする。ただし、長老が順番を指定しているから、大きな動きはない。

ドンドコ、ドンドコ、タンタンタンタン。二歩前進だが、先頭の男女は足踏みのあいだも  
前に進んで、後ろと間隔を空ける。

コココン、コココン、コココン、コココン。先頭の男が、娘に近づく。男を受け容れる  
なら、娘も男のほうへステップして手をつなぐ。

カップルが成立すればバックステップのところ足踏みして後ろとの距離を空け、二番

手の『お見合い』が始まる。

娘がサイドステップを踏まないときは——しばらくの間、コココンが続く。そのあいだに男が口説くのだが、実際には長老の指図に逆らう娘はいない。ちょっとすねて、男に余分なステップを踏ませるだけだ。

ステップは単純だし、手は駆けっこのように前後に振るだけで、振り付けもない。梢恵も美咲も、すぐに覚えたのだが。

ひと休みしてから、観光客へのサービスの色合いが強いおさらいが始まったとき、ハプニングが起こった。AVの女優二人が、ニャノミの扮装をして列に加わったのだ。長老の指図だったから、ハプニングではないのだろうけれど。さらに男優（だろう）も二人が男の列に並んだ。男優も、ちゃんとニャノミの扮装、つまり腰帯だけでペニスを露出している。

「女優と男優とでするんなら、なにもこんな所まで来なくてもいいのにね」

美咲は呆れ気味だったが、梢恵の予想は違っていた。

「そうかな。相手がそれぞれニャノミだったら、四対四の集団乱交になるよ」

どっちみちAVには近づかないようにしようという意見は、ふたりとも変わらなかった。生涯に一度のロストバージを翌日に控えて、しかも露出行為の真っ最中。自分のことだけで、頭も下半身もいっぱいいっぱいだった。

——夕食のときは、三百人のニャノミと撮影チームを含めて六十人近い訪問者とで広場が埋め尽くされた。その中に紛れ込めれば、すこしは落ち着くのだろうけれど、そうもいかなかった。白い足飾りの娘たちだけが集められて、五つの焚火を順番に回らされた。

これと見初めた男が、何人かいる世話役に耳打ちして、それが長老に伝えられて——明日の相手が決められるのだ。男というのは、ニャノミの青年もいれば買春客もいる。買春客などは、露骨に娘を指差して、” Four thousand” とか ” Five” などと言っている。

儀式に参加する娘は、梢恵と美咲を含めて三十五人。白い足飾りは十九人。そのうちの（フロルの予想によると）十人くらいは、買春客の相手に選ばれる。数字だけを考えれば、

ふたりの相手がニャノミの（イケメンはともかく）青年になる確率は半々だった。

「売春でもいいんじゃないかな」

長老のテントに引き上げてから、梢恵が美咲にささやいた。

「ニャノミのセックスでさあ、いきなり突っ込んで腰振って、はいオシマイ。フロルさんの話を聞いていると、そんな感じだよ」

買春客なら、ねちねち弄りまわされて——濃厚なセックスになりそうだ。

「あ、そうか。ふうん……」

それに、（五千ドルの半分の半分として）十ン万円も魅力だった。親に言えない裏費用で、ふたりともお年玉貯金はスッカラカンだ。

「お客の中にも、まあまあな男性、わりといたよね」

どうせなら、そんな人を買われたいなというのが、正直なところだった。

もつとも、儀式は二日間に及ぶ。白い足飾りの娘は、相手が気に入らなければ二日目は長老に頼んで別の男をあてがってもらうこともある。客に身体を売る娘は、よほど客が執着しないかぎりには違う客に抱かれるから——二日連続でスカを引くこともないだろう。

#### 4. 不浄

一夜が明けて、いよいよ儀式の当日。儀式は午後からだだが、狩猟や採取あるいは手仕事を休んで、広場は昨日よりずっと賑やかだった。小さな台の上に木彫りのペンダントや人形を並べて、観光客相手の商売をする者もいる。ニャノミの青年も、女の子へのプレゼントを漁ったりしている——といっても、チラホラ程度。ドルを持っているものは少ないし、真心を込めた手作りを喜ぶ娘も多いあたり、ブランド好き少女が多い日本とは違っている。祭りを控えて浮かれた雰囲気というのは、文明も洋の東西も越えて人類共通だった。ところが。

「だむやくろ！」

男の引きつったような叫び声が起こった。目の前にいる少女を指差している。

「おおお……」

「だむやくろ！ なじじ！」

「きゃああ、だむやくろ」

女の悲鳴も混じっている。

たちまち少女のまわりに人が集まって、響きから推測して非難の言葉を浴びせる。

梢恵と美咲も、騒ぎに巻き込まれてはいけないと思いながら、足を止めてそちらを見てしまう。

フロルだった。立ちすくんで、股間に手を当てて、はっとした表情であたりを見回している。股間から内腿にかけて、赤く染まっていた。

長老が老体に鞭打って駆けつける。

「いばばひよ……………」

早口でまくしたて、フロルに指を突きつけた。

「あは一ぶ！」

「さまはに、しくおな」

フロルが謝罪する。が、両側から男に腕をつかまれて、広場の奥へ引きずられた。

フロルの両手両足に太い蔓が巻きつけられ、三メートルほど離れて立つ二本の喬木に結びつけられた。フロルはX字の形で磔にされた。足は地面に着いている。

フロルの腰を巻く帯が剥ぎ取られ、足飾りも取り去られる。フロルは抵抗せず、されるがままだった。

突然の騒ぎに、観光客も集まってくる。その中には、杖を突いた老人も混じっていた。だけなら、老いて益々盛んなのか色惚けなのかはともかく、梢恵も美咲もあまり気にしなかっただろうが。サマージャケットのボタンをきっちり留めた男四人が老人を取り囲んでいるとなると、ひどく目立つ。

しかし、注意がそれたのは一瞬のこと。

“Girl contaminate ceremony blood. Girl will clean.”

長老が声を張り上げて説明するのを聞いて、二人の関心はフロルに引き戻された。

いつの間にか、大型のビデオカメラが人垣の前にしゃしゃり出て、フロルにレンズを向けている。その前に中年のニヤノミが立ちふさがった。昨夜は世話役を務めていたうちの一人だ。カメラの斜め後ろに立つ監督に向かって右手を突き出す。

「マネー、マネー。ワンサウザンド」

「ウィーハブパーミッショントゥテイクムービー」

「マネー、マネー。ワンサウザンド」

「ツークスペンシブ」

監督が負けず劣らずのブロークンで交渉を始めるが、ろくに言葉が通じなければどうしようもない。長老も首を横に振るだけで、取り合わない。結局、押し切られてしまった。

ほかの世話役も観光客を見回して、カメラやスマホを見つけると『ワンハンドレッド』。商業的な撮影と個人的なそれとの区別がついているのか、それとも機材の大きさと判断しているのか。

フロルの横に、水を張ったバケツが置かれた。若い男が、束にした蔓を持って、フロルの前に立った。蔓を水に浸して——フロルの股間を、掬い上げるように打った。

バシイン！

「きゃああつ……！」

赤い水しぶきが飛び散って、フロルが悲鳴をあげる。

「さまはに。にはて・・・きばん<sup>コ</sup>な

哀願は無視されて、二発三発と蔓の束が股間に叩きつけられる。

十発ほどで、経血はきれいに拭い去られた。股間から内腿にかけて、赤黒い線条が走っている。フロルは頭を垂れ膝から力が抜けて、半ば宙吊りになっている。

“Girl is clean. But will punish.”

別のバケツがフロルの前に置かれた。ばしゃんばしゃんと水が跳ねている。

「あああ……さまはに、にさめへ」

フロルが懇願する。しかし、諦めているのか言葉は弱い。

肘まである分厚いゴム手袋を嵌めた男がバケツに手を突っ込んで、太い蛇のような生き物を取り出した。長老が、その生き物を指差して観光客に説明する。

“Electric eel.”

開脚した股間と電気ウナギ。これから何が始まるか、梢恵と美咲にも明確に予想できた。

体長が八十センチくらいの豚が連れてこられた。毛を刈った猪かもしれない。胴体はピンク色の肌が剥き出しになっているが、顔や足には黒っぽい毛が生えている。

電気ウナギの蛇のような胴体が、ニャノミの男に押さえ込まれている豚猪に押しつけられた。

ブギャンツ……！

豚猪が短い悲鳴をあげて、どさっと倒れた。

“Uohhh…!”

“Terrible! Electric shock.”

観光客のあいだから、驚きの声があがった。

「フロルさん、死ぬんじゃないの？」

美咲が梢恵にしがみついた。けれど、豚猪が立ち上がるのを見て、ほうっと息を吐いた。

「外貨を稼ぐチャンスをつぶすほど、ニャノミの人たちも考え無しじゃないよ」

殺人事件を見せつけられては、ロリコンどももその気が失せてしまう……だろうか？

電気ウナギがいったんバケツに戻されて。バシャバシャと暴れる元気を取り戻してから、フロルへの処罰が始まった。

AVのビデオカメラが、ぐっとフロルに近寄る。他の観光客は、ニャノミの男が水平に寝かせた槍に阻まれて、その場から動けない。これも、千ドルと百ドルの違いだろう。

「……フロルさん、かわいそう」

梢恵がつぶやく。美咲も、それ以外に言葉がなかった。

フロルはひきつった表情で、自分の股間に近づけられる電気ウナギを凝視している。電気ウナギの頭が、淫裂に隠れた。

「ぎゃああああっ……！」

絶叫がフロルの喉から迸った。反射的に腰を引いたが、男の手が追いかけて、電気ウナギは挿入されたまま。さらに、ずぶずぶと押し込まれていく。

「ぎひいっ……がはっ……ひいい……」

フロルの腰が激しく痙攣する。悲鳴が短く途切れるのは、電気ウナギが放電してから蓄電するまでに数秒の時間を要するからだろう。

電気ウナギが体長の半分ほども押し込まれたところで、フロルの頭がガクンと垂れた。

「さわ。びんていぶら……」

長老が右手を挙げて、重々しく宣した。

電気ウナギが抜き去られて、フロルは磔から解放された。膝から崩れ落ちかけるところを二人の男に抱き止められて。そのまま、森の奥へ引きずられて行った。

“Dirty girl arrest in cottage.”

捨てられたりするのではなく、たぶん森の奥にある小屋に隔離されるだけらしいと分かって、ふたりは——まるでずうっと呼吸を忘れていたみたいに、大きく息を吐いた。

陽が高くなると、広場から焚火が片付けられ地面が掃き清められて。土産物売りの台も隅へ寄せられる。広場の中央から五メートルほど寄ったあたりへ横一列に杭が打ち込まれて、太い蔓が二段に張られた。見物席というわけだ。

そして、儀式が始まる。

最初に娘が一列に並ぶ。青い足飾りを付けた十六人が先頭。そのうちでも、白い腰帯が前に来る。梢恵と美咲は、白い足飾りの先頭に並ばされた。白白は、六人だけ。十四人が赤い腰帯と白い足飾り。その中に、フロルの姿はない。

そのかわり（ではないだろうが）、最後尾に白い肌の女性がひとりだけ加わっている。全裸に腰帯と足飾りだが、肌に化粧はせず顔には薄くメイクを施した——AV女優だ。いちばん大柄なニャノミの娘よりも頭半分は背が高い。

人種の差ではなく、年齢の差だ。ニャノミの娘は十代のうちに子を産む。性熟しきった女が儀式に参加するなんて、ありえない。

「そっか。ニャノミの男の人とホンバンをするなら、これしかないよね」

若い乙女が日本では絶対に口にしないようなことを、美咲が平然とつぶやいた。

「じゃばに、はばな」

梢恵が振り返って、覚えてたのニャノミ語で『ニホン、ダメ』とささやく。今は誰にも聞かれなかったが、気の弛みが失敗につながる。

「さわ」

美咲も『分かった』と返した。

女性は二人いたはず。もうひとり、メイク係か何かなのかな。でも、リハーサルには二人とも参加していたよね。と、どうでもいいような疑問が梢恵の頭をかすめたが、すぐに忘れた。

ドンドコドンドコ……

広場を挟んで見物客と向かい合う形で座り込んだ十人ほどの男たちが、打楽器を打ち鳴らし始めた。娘たちがステップを踏み始める。サイドステップは入れない。

男たちが一列になって、後方から娘たちの左側に並び掛ける。腰布を巻いた観光客が混じっている。ニャノミと同じように腰帯ひとつでペニスを露出している猛者も三人いたが、そこに昨日のAV男優の姿はなかった。AV男優とは違って、三人のうちの二人は派手に勃起させている。それは無作法な振る舞いで、ニャノミだったら列から引きずり出されるところだが、ドルの威力が無作法を罷り通らせている。

ドンドコドンドコ、タンタンタンタン……

打楽器の音が大きくなった。男も女も、激しい身振りでステップを踏む。列に入った観

光客、いや買春客は照れ臭そうにしているが。

(うげ……)

梢恵は隣に並んだ男を横目で眺めて——失望と期待が複雑に絡まり合った気分になった。褐色の王子様という幻想が打ち砕かれただけでなく、よりによって、なんでこんなのと——と、思わず涙眼になってしまいそうな、白人中年のメタボ親爺だ。その後ろ——美咲の『お客』も、似たり寄ったりだった。

ドンドコドンドコ、タンタンタンタン。

コココン、コココン、コココン、コココン。

ずっと後ろまで振り返ると、男性の最後尾はニヤノミのマッチョイケメンだった。

もしかしたら、カメラ映りのいい男を、逆に金を払って買ったんじゃないだろうか。梢恵のひがみというよりは、AVを作るならそうするだろうという推理だった。

ドンドコドンドコ、タンタンタンタン。

ドンドコドンドコ、タンタンタンタン。

コココン、コココン、コココン、コココン。

『お見合い』は、なかなか始まらない。だんだんピッチが早くなっていく。

単調に激しく身体を動かしているうちに、頭の中が空っぽになっていく。そこに、いっそう強くなったボタンの刺激が突き上げてきて——腰の中に頭が引越したような、わけの分からない感覚に包まれる。隣にいる男性と動きがシンクロして、心まで溶け合ったような錯覚に陥る。

ガガガガガガッ……

打楽器が不意に乱打された。

「くわじょじ、くわじょじ、くわじょじ、くわじょじ！」

長老が両手を天に突き上げて叫んだ。

ドンドコドンドコ、タンタンタンタン。

ピッチがすこし緩やかになった。

コココン、コココン、コココン、コココン。

先頭の男女が、手をつないで前へ進んだ。前後が開いた列のまん中に二番手が進み出て。これもすんなりとカップルになった。事前に相手が決まっているのだから当然だ。

『お見合い』は順調に進んで、梢恵の番になった。

そんなに悪い相手ではないと、梢恵はそう思うようになっていた。激しい運動を続けてランナーズハイになっているのか、クリトリスの刺激で恍惚となっているのか、非日常的なシチュエーションが後押ししているのか。おそらく、そのすべてだろう。

メタボ気味だけど背が高く、全体に大きい。圧倒的な力の差を感じて、彼に組み敷かれる自分を想像すると——腰の奥がねじれるような感覚が生じた。

きっと、いろいろあれこれしてくれて……

梢恵は左へステップして男の手を握った。

コココン、コココン、コココン、コココン。

男と一緒にサイドステップを踏んで

ドンドコドンドコ、タンタンタンタン。

足踏みのパートも前に進んで、後ろとの距離を空けた。

美咲もすんなりと相手を受け容れて。

白白の三組目でハプニングが起きた。

ニャノミ同士の組み合わせだったが。広場の隅から青年が駆け出して来て、娘の右側に並んだのだ。娘を挟んで、両側に青年。

コココン、コココン、コココン、コココン。

サイドステップで二人の青年が同時に娘に近づき、手を差し伸べる。娘は二人を見比べて——乱入した青年に向かってステップを踏んで手をつないだ。

「おおおおお」

儀式を見守っていたニャノミからどよめきがあがった。

振られた青年は両手を天に突きあげるような動作を繰り返しながら列から抜けて、娘を

奪い取った青年が男の列に加わった。

へええ、恋の鞘当て？ 結婚式での花嫁強奪かあ。

梢恵も美咲もそんなふうにした。観光客を喜ばせるための『やらせ』だと疑ったりはしなかった。

それ以後は順調に『お見合い』が進んで。ニャノミイケメンとAV女優のカップルが成立して儀式は終わった。男女で手を取り合って広場の端まで進んで、そこからは愛を営む場所へと散り散りになる。ニャノミ同士は、日が暮れるまで広場の隅で愛を語ったり、河や森へとデートに出かけたり。デートの途中で青姦にいたる場合も少なくない。

春を売った少女たちは、それぞれの客が借りているコテージへ連れ込まれる。しみつた客だと自前でテントを持ち込んだりするが、長老の采配で初日はあぶれてしまうのがオチだ。

梢恵も美咲も、ちゃんと(?)コテージに連れ込まれた。